

# あるドキュメンタリー番組を観賞した時の看護学生の視点

看護師を志す学生と保育士を志す学生の感想文から

片川 智子  
KATAKAWA, Satoko

小島 洋子  
KOJIMA, Yoko

金城やす子  
KINJO, Yasuko

## I 研究目的

少子、核家族化が深刻な問題となっている昨今では、学生が日常的に育児の様子を観察したり体験する機会が減少している。小児看護学教育では視聴覚教材の導入や演習など様々な工夫により、健康な子どもの成長発達の理解や、子どものケアに関する学習効果を高める努力がなされているが、こうして展開される小児看護学教育の中で、学生の小児観や小児看護観はどのように育まれているのだろうか。

本研究は、ある小児病棟で1日1日を懸命に生きる子どもを描いたドキュメンタリー番組（VTR）の感想文から、看護学生が何を感じたり思ったりしているかを分析し、問題や課題を明らかにすることを目的とした。

## II 研究方法

1. 研究対象：A短期大学の看護師を志す学生 55名（以下看護群と称す）  
B短期大学の保育士を志す学生 55名（以下保育群と称す） 計 110名

### 2. 研究方法：

#### 1) 調査方法

平成 15 年に放送されたNHKスペシャル「こども－輝けいのち－」シリーズ第 4 集『小さな勇士たち－小児病棟ふれあい日記－』を観賞し、感想を自由に記述してもらった。観賞にあたっては病気で入院している子どもを理解するという目的だけを説明し、内容については触れなかった。またその際、学生には成績等には関係のないことと、個人は特定されないことを説明し、同意を得た学生の感想文を回収した。回収率は看護群 94.8%、保育群 95.1%であったが、今回は保育群を無作為抽出により看護群の 55 名と同数にした。

#### 2) 実施時期

看護群＝単元「小児看護学概論」と「小児の成長発達と生活」を終講した平成 15 年 12 月（1 年生）

保育群＝児童教育学科に在籍し保育士選択必修科目「小児保健」（講義中）「小児保健実習」（終講）の平成 15 年 9 月（1 年生）

#### 3) 分析方法

記述された「感じたこと」「思ったこと」「考えたこと」など、意味内容の類似性、相違性に沿って分類、命名し、その傾向をみる。

### Ⅲ 結果

分類、命名は現在も内容の吟味と検討を行っているが、3回目の分類を繰り返した時点での結果は【表1】のとおりであった。記述より532データが抽出され、63コード（サブカテゴリ）、7カテゴリに分類された。表1は両群の総数でデータ数の多かったカテゴリから順に、サブカテゴリの看護群、保育群のデータ数を表示した。

表1 学生が記述した感想の分類表 n=532

| 分類内容                                  | データ数 |      |
|---------------------------------------|------|------|
|                                       | 看護群  | 保育群  |
| <b>カテゴリー1【こども像】 113 データ</b>           | 計 80 | 計 33 |
| 1)子どもなのに大人以上にもの事を考え、感じている             | 24   | 10   |
| 2)辛いことも受け止めて乗り越えようとする力がある             | 15   | 8    |
| 3)けなげで懸命に生きようとしている                    | 10   | 5    |
| 4)誰に言われたわけでもなく自然に人と関れる力がある            | 8    | 3    |
| 5)子ども同士の中に強い絆が誕生している                  | 9    | 4    |
| 6)小さいのにとっても強い                         | 8    | 1    |
| 7)相手を気遣い心配かけないようにしている                 | 1    | 2    |
| 8)人の本質が見えているようだ                       | 2    | 0    |
| 9)子ども独自の世界を持っている                      | 1    | 0    |
| 10)損得を考えずに人に役立つことを考えられる               | 1    | 0    |
| 11)不可能というマイナスな言葉がないようだ                | 1    | 0    |
| <b>カテゴリー2【友達や周囲の人の支えの重要性】 105 データ</b> | 計 21 | 計 84 |
| 1)友達の存在と励ましあいは生きる意欲につながる              | 8    | 42   |
| 2)周囲にいる両親・医師・看護師も大きな支えになっている          | 10   | 16   |
| 3)成長発達する子どもにとって人と人との関わりが重要            | 2    | 15   |
| 4)一緒に生活することで人を思いやる気持ちが生まれる            | 0    | 6    |
| 5)一緒に入院生活を送った人たちはかけがえのない存在になる         | 1    | 1    |
| 6)子ども同士の絆は相手のために何ができるかを自然に考えさせた       | 0    | 4    |
| <b>カテゴリー3【子どもと比べた私、大人】 79 データ</b>     | 計 47 | 計 32 |
| 1)私が入院したらこの子どもたちのようにはできないだろう          | 14   | 8    |
| 2)友達のいることをあたり前のように感じていた               | 9    | 6    |
| 3)この子らの方がはるかに強く、大人かもしれない              | 5    | 4    |
| 4)何気なく生きている私と違って、子どもたちは精一杯生きている       | 3    | 5    |
| 5)大人にはあんな純粋な気持ちはない                    | 1    | 2    |

|                                   |      |      |
|-----------------------------------|------|------|
| 6)健康であることを幸せに感じた 恵まれていると思った       | 6    | 5    |
| 7)私には考えられないくらいの不安の中で生活している        | 3    | 2    |
| 8)大人の言葉はどこまで心がこもっているだろうか          | 1    | 0    |
| 9)自分はずっとしっかりしなくてはと思った             | 1    | 0    |
| <b>カテゴリー4 【こどもの気持ちの理解】 76 データ</b> | 計 22 | 計 54 |
| 1)T君の俺がやらなきゃという優しさとたくましさを感じた      | 9    | 22   |
| 2)目が見えないのにS君はどうしてそんなに明るかったのか      | 4    | 13   |
| 3)どうしてこんなに小さな子どもが死ななくてはならないのか     | 4    | 3    |
| 4)治ると思っているS君を見るのがつらかった            | 2    | 5    |
| 5)どんなに辛かったらうか                     | 1    | 4    |
| 6)自分も辛いのに家族のことが心配できるなんてすごい        | 1    | 5    |
| 7)家族もたまらなかつたらうか                   | 1    | 0    |
| 8)S君の目は見えないが、心で見えていたと思う           | 0    | 1    |
| 9)遅れることを怖がってリハビリをしなかったAさんにはっとした   | 0    | 1    |
| <b>カテゴリー5 【子どもの病気・入院】 63 データ</b>  | 計 26 | 計 37 |
| 1)病棟では子どもが明るく楽しく過ごせるように取り組んでいた    | 3    | 10   |
| 2)入院生活をとおして思いやりの心がはぐくまれている        | 3    | 7    |
| 3)スタッフや病棟の雰囲気は明るく自然であった           | 2    | 2    |
| 4)子どもは苦痛に耐えていると思ったが笑顔も見られていた      | 5    | 3    |
| 5)入院は子どもにとって大きなストレスとなる            | 2    | 1    |
| 6)病棟ではがんばろうという気持ちが育っている           | 5    | 3    |
| 7)病気の体験をマイナスにはしてはならない             | 3    | 3    |
| 8)社会のマナー・道徳を学ぶ場になっている             | 2    | 4    |
| 9)病気は恐ろしい                         | 0    | 1    |
| 10)入院経験は退院後の生活の力になる               | 0    | 1    |
| 11)病棟は生と死が隣り合わせになっているところ          | 0    | 1    |
| <b>カテゴリー6 【看護のあり方・意義】 57 データ</b>  | 計 19 | 計 38 |
| 1)子どもを取り巻く環境や関り方が大切               | 6    | 11   |
| 2)人間関係が心を育てる                      | 3    | 5    |
| 3)コミュニケーションの大切さ                   | 2    | 5    |
| 4)自己の振り返りが必要                      | 3    | 0    |
| 5)前向きな姿勢で生きることの大切さ                | 3    | 0    |
| 6)子どもには成長と病気の両方からのケアが必要           | 0    | 5    |
| 7)今まで知らなかったことを知る機会となった            | 0    | 5    |
| 8)治ろうと思うことが大切                     | 0    | 4    |
| 9)子どもたちは医師や看護師をしっかり見ている           | 1    | 1    |
| 10)ただ救いたいと思うのではなく元気な子どもと同じようにかかわる | 1    | 1    |

|                                 |      |      |
|---------------------------------|------|------|
| 11)スタッフから元気がなかったら、子どもの看護はできない   | 0    | 1    |
| <b>カテゴリ7【職業観】</b> <b>39 データ</b> | 計 25 | 計 14 |
| 1)看護師・保育士になって精一杯やってみたい          | 11   | 4    |
| 2)子ども(患者)のことを思いやれるような人になりたい     | 11   | 9    |
| 3)ひとつの命を預かっているという意識を持ち続けたい      | 0    | 1    |
| 4)人の死には慣れない看護師になりたい             | 1    | 0    |
| 5)友達が病気になったときあの子たちの様にしてあげたい     | 1    | 0    |
| 6)もっと小児医療を学びたいと思った              | 1    | 0    |

教材となったVTRを観賞した時、看護群が感想として最も多く記述していたのは、【子ども像】に関する記述であった。次いで【子どもと比べた私・大人】【友達や周囲の人の支えの重要性】であった。保育群は【友達や周囲の人の支えの重要性】が最も多く、【子どもへの気持ちの理解】【看護のあり方・意義】に関する記述が次いで多いものであった。総数で見ると【こども像】に関する記述が最も多かった。

#### IV 考 察

学生が観賞した番組は、小児癌の子どもたちが人(友人)との触れ合いに勇気づけられながら、1日1日を懸命に生きている様子や、その子どもたちを見守り、子どもにとって何が一番よいことかを考えながら支える周囲の人々を描いたものであった。子どもの一人は治療の甲斐なく6歳で他界し、他の子どもたちはそれぞれの想いを胸に退院していった。このドキュメンタリー番組を看護学生と他の学生が見た時、どのような点に注目し、何を感じたり考えたりするのだろうか。看護学生としての特性はあるのか。これらを明らかにする目的で、今後も分析を繰り返し討議を重ねる予定である。

現在までの分類では【表1】のような結果であった。

##### 1. カテゴリ1【子ども像】に関する記述について

看護群が最も多く記述したのは【こども像】に関する内容であった。保育群では【友達や周囲の人々の支えの重要性である】に関する記述が最高で看護群と異なった。番組には、友達との心の交流が子どもたちの生きる力になっていた場面が多く描かれており、その点が番組の意図するひとつではないかと思われたが、看護群の学生は友人関係や人と人との触れ合いということより、子どもの姿に多く注目していた。これは、看護群の学習レディネスが「小児看護概論」と「小児保健」に該当する科目を終了したところで、調査時期ではまだ「健康障害と看護」については学習していない。また小児看護実習も、調査2ヶ月ほど前に3日間の保育園実習を経験したレベルで、病気で入院している子どもとの接触の機会はほとんどない。そのため、学生は画像で見る実際の「こども像」に注目したのではないかと考えられた。

##### 2. カテゴリ2【友達や周囲の人の支えの重要性】について

保育群の記述はこのカテゴリに関する内容が最も多かった。理由として、調査時期は看護群より3ヶ月程早かったが、保育群の学生たちは入学時より「小児保健学」以外にも

乳幼児・児童期の保育や教育についての専門教育が開始されており、看護学生以上に子どもの概念や、こどもが育つ環境について学習している。またこれまで描いてきた病院のイメージは治療の場が大半だったと思われるが、病院の中にも子どもが育つ環境があり、子どもが生き生きしている姿から、人との関わりの重要性に目を向けたのではないかと考えられた。

### 3. その他について

カテゴリー4【子どもの気持ちの理解】に関する記述では、総数76データに対して、看護群22データ、保育群54データと差があった。保育群では登場するT君やS君への思いを「かわいそう」「辛かっただろう」「すごい」「うれしかった」というような表現で記述している学生が多く、看護群との違いがあるように思われた。

また、【職業観】に関する記述では、看護群が保育群を上回って看護師になりたいとその志を記述していたが、カテゴリー3【子どもと比べた私・大人】では、私が入院したらこどものようにはできないだろうと記述する学生も多く、看護学生の複雑な気持ちが現れているようにも思われた。

## V 今後の課題

効果的な小児看護学教育を考える際、まず「健康な子ども」についての知識が基本になるが、保育群と比較をすると、看護群は子ども像を知るレベルであると思われた。同じ教育課程にあるわけではないので、優劣をつけるものではないが、原因を考える必要もある。今後も記述内容の分類・検討をさらに重ね、看護学生の視点から小児看護学教育の問題と課題について考察する予定である。